

講 演

共存原理と与贈共同体

清 水 博*

マスコミの予想に反して、トランプ氏が米国の次期大統領に選出された原因が明らかになってきた。それは、資本主義経済のグローバル化が実体を超えて進んだために、近代的な国民国家 nation state の主体となってそれまで国家を支えてきた中流の人々の存在が圧迫されて国家の基盤が傾いたことによっておきた国民国家のグローバル化経済に対する揺り戻しであった。近代的な国民国家の揺り戻しを暗示するような変化が、英国を始め他でも幾つか見られるし、今後もそのような動きが増えていくと思われる。

21世紀は地球文明の時代、すなわち地球全体を一つのシステムと考えなければならない時代である。しかし、この21世紀のシステム論は、20世紀のシステム論——近代的な国民国家を基盤にした民主主義の多数決原理と資本主義経済の競争原理——とは、全く異なるものであることは明らかである。少し考えてみれば分かるが、21世紀には多様性と主体性が重要なテーマになる。そこで必要になるのは力の弱いものの存在への配慮である。多数

決原理の裏には競争原理があるから、存在しているものの主体性が競争原理を超えて重んじられなければならないのである。この点に十分な配慮がされないまま、20世紀のシステム論がそのまま21世紀に使われてきたために、内部矛盾が生まれて行き詰まりが生じたのである。そこで必要になるのは、旧いシステム論を乗り越える具体的な方法である。

20世紀の国民国家の基盤は近代社会であり、そのシステム論は近代における「近代人の発見」（自我の発見）と結びついて発展してきたものである。したがって、この人間像を変えないかぎり、その上につくられてきたシステム論を変えることはできない。地球文明の時代の人間像は、人間ばかりでなく、人間とそれ以外の多様な生きものとの共存が自然にできるものでなければならない。一つの時代の人間像を決めている活きは一体何だろうか。日本の近代社会に住んでいる自分自身のことを考えてみると、私が日常的に生活しているときに、「この振る舞いは近代人らしいだろうか？」などと、自分の行為を一々

* 場の研究所長

自分の意識で判断しながら生きているわけではない。近代社会という居場所のなかに生きていることによって、無意識のうちに近代人として振る舞っているのである。したがって人間像としての近代人を越えて地球文明の人間になることは、たとえ小さく、また不完全であっても、共存在の居場所をつくって、そこで無意識のレベルから共存在的に振る舞うことができる状態をつくりださなければならないことになる。

近代社会というシステムでは、個人は互いに分離している。またそればかりでなく、その個人の存在が居場所とも切れて、「我とそれ」の関係になっているから、個人は互いに独立している。そしてその個人の存在の間には競争原理がはたらいているから、その近代社会というシステムのなかで生きていくためには、基本的に独立して相互に競争しなければならないという原理に縛られてしまうことになる。しかし21世紀になって、それまで社会を主体的に担ってきた人々が大量に弱者となって、社会の基盤としてはたらいてきた競争原理を否定する活きをしているために、内部矛盾が生まれ、どうしても競争原理に代わる共存在原理を柱にする新しい時代の人間像を発見することが必要になってきているのである。そのためには、無意識のレベルから変わらなければならない。

人間の無意識を系統的に詳しく研究してきたのは、仏教の唯識論しかない。それによると、人間の意識の奥底には、無意識がはたらいていて意識の活きをコントロールしている。しかしその活き方は一方的で、意識の方から逆に無意識をコントロールすることは

できない。また無意識は性質の異なる二つの層からできており、表層的な無意識を末那識（まなしき）、深層の無意識を阿頼耶識（あらいやしき）という。末那識の活きは利己的であるが、それによって人間は自立することができる。また阿頼耶識の活きは利己利他的（共存在的）であるが、それは末那識の活きを通して、それを超えるという形でしか現われることがない。

末那識の影響を強く受けているのが近代人の意識であるが、多くの弱者との共存在という現実的な課題が、阿頼耶識に支えられた意識をもつ新しい人間像の出現を必要としているのである。ここで誤解を避けるために指摘しておきたいことは、20世紀のシステム論を基盤にしたこれまでの社会では、強者が弱者を支えるという構図になっていたが、そのことが破綻したのが現状であり、それとは別の共存在的な方法が必要になっているのである。その方法は、強者も弱者も共に居場所につながる「生活のドラマ」の役者として、それぞれ存在を主体的に表現することができるように、互いに支え合うという方法である。言い換えると、21世紀の共存在社会のシステム論にはいわゆる「おたがいさま」の関係が必要になるのである。

共存在社会のシステム論が近代社会のシステム論と異なるのは、後者の深層基盤となってきた末那識よりも、さらに深層にある阿頼耶識の活きに基盤を置かなければならない点である。これは末那識の活きを捨てて阿頼耶識の活きを選択するというのではなく、阿頼耶識に達するまで無意識の活きを深めるということである。結論から言えば、そのため

に必要な行為は与贈——見返りを求めずに、自己の活きを居場所に差し出すこと——である。だから、おたがいさまがつくる共存社会は与贈によって生まれる与贈共同体なのである。

その与贈共同体には、人間以外の地球上の生きものも最終的には含まれなければならないことから、生活体とその与贈共同体の理論を〈いのち〉を共通の基盤にして考えることが必要になる。生活体とは、細胞、動物、人間、家庭、企業、地域社会、国家など、生活をして生きていくものである。私の理論（〈いのち〉の科学の理論）は、生活体とその居場所である与贈共同体に関する次の四つの仮説からつくられている。

- (1) 生命は実在しない。実在しているのは〈いのち〉である。〈いのち〉＝存在を維持しようとする生活体の能動的な活き
- (2) 生活体は〈いのち〉を生み出しつつ、その能動的な活きによって存在を続けていく。
- (3) 生活体には、生み出した〈いのち〉を、自己が存在する居場所に与贈する与贈主体がある。
- (4) 複数の生活体から居場所に与贈された〈いのち〉の活きが一定の閾値を超えると、〈いのち〉の自己組織がおきて居場所の〈いのち〉が生成する。

上記の仮説を解説しよう。これまでの科学では、研究するものを外側から観察して、生きていれば「生命がある」、生きていなければ「生命がない」と言ってきた。また科学は、生活体とその居場所を、その主体的な当事者の立場に立って内側から見ることはできな

い。それは、科学には客観的でなければならないという枠がはめられているからである。したがって生活体とその居場所には、無意識の活きのように、内側からでなければ決して見ることができない性質が、まだ科学的に研究されずに残されている。内側にも踏み込んで、生活体の活きを明らかにしていくことが〈いのち〉の科学の目的であり、上の四つの仮説はそのためにつくられたものである。

機械は休むことができるが、自分自身を内側から観察して分かることは、生活体としての人間は、生きている限り、絶えず未来に向かって生き続けていかなければならないということである。夜、眠ることでさえ、生き続けていく活きの一部である。この生き続けていく状態を、生活体を生み出す活きをするのが〈いのち〉である。生活体は親からその〈いのち〉をいただいて生まれてくるが、誕生後は、自分自身で自分のなかに〈いのち〉を生み出しながら、その〈いのち〉の活きによって生きていくのである。

生活体は、自分が生みだした〈いのち〉を自分自身のために使うばかりでなく、見返りを求めずに、それを居場所に与え贈ることができる。それが〈いのち〉の与贈である。居場所とは、家族に対する家庭のように、生活体自身がその当事者としてそこで生活していく場所のことである。ここで重要なことは、居場所にも「居場所の〈いのち〉」があるということである。生活体が居場所に入ると、その居場所の〈いのち〉に包まれる。生活体はそのことを、役者が舞台に対して抱く情感のように、「居場所の場に包まれている」と感じるのである。このことからわかるよう

に、おたがいさまの関係づくりは居場所づくりである。

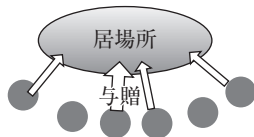
生活体は居場所において主体的に生活していけるように、主体的に与贈する活き——与贈主体——をその内に与えられて生まれてくる。居場所に居場所の〈いのち〉があるのは、その居場所で生活している生活体が〈いのち〉を与贈するからである。家族が家庭にお土産を買って帰ったり、家庭のためにはたらいたりするのは、居場所としての自分の家庭に対する与贈である。そのことで家庭に居場所の〈いのち〉が生まれて、その〈いのち〉によって家族を包むために、家族は家庭に暖かい場を感じるのである。そのことは、居場所としての家庭が、その居場所の〈いのち〉を家族に与贈していることを意味している。生活体が居場所に与贈した〈いのち〉が居場所の〈いのち〉として生活体に戻ってく

ることを、私は「〈いのち〉の与贈循環」と名づけている。

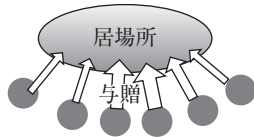
場の研究所の前川泰久が作成した図1に示すように、生活体が居場所に与贈した〈いのち〉は、そのまま居場所の〈いのち〉になるわけではない。居場所の〈いのち〉が生まれるためには、居場所の〈いのち〉の自己組織がおきることが必要なのである。生活体が与贈する〈いのち〉に「〈いのち〉の与贈密度」とでもいう量があり、その与贈密度がある閾値を越えると、〈いのち〉の与贈循環がおきて温かい場が居場所に生まれるが、閾値をこえなければ〈いのち〉の与贈循環はほとんどおきないために場が生まれず、末那識中心のギブ・アンド・テイクの冷たい関係になる。このことは閾値以上のエネルギーをレーザーに与えると、光の自己組織がおきてレーザー光線が出てくることにたとえられる。

図1 〈いのち〉の自己組織と与贈循環

与贈が少ないとき



与贈が増大していく



ある閾値をこえると



自己の〈いのち〉だけが活く一領域的世界を生きていく。

ここで、家庭で家族の為に働き、思いやりをもち、いつも支えるような気持ちで、代償を求めないはたらき（与贈）を家族で互いに与え合っていくことで居場所に〈いのち〉が生まれる。

そして、この和やかなりの絆が、あるレベル以上にできあがると、その場は豊かになり自己組織化して、居場所自身から自分に対して安らぎ（与贈）が与えられるようになる。

このあるレベルになる（閾値を越える）現象は、ちょうど普通の光が、エネルギーのレベルアップによりレーザー化することと似ている。

同様に、〈いのち〉の与贈密度が閾値以上になると、生活体の与贈主体が互いに刺激し合って〈いのち〉の与贈量が増えるために、〈いのち〉の自己組織が連続的におきて、〈いのち〉の与贈循環が続いていくのである。

「与贈共同体」は、与贈主体が互いに刺激し合い、〈いのち〉の与贈循環が続いておきている居場所のことである。人間の身体は約60兆個とも言われる細胞の与贈共同体である。つまり、約60兆個の細胞はおたがいさまの関係にある。このことから、おたがいさまづくりは与贈共同体づくりであると言える。したがって、おたがいさまづくりで重要な問題は、〈いのち〉の与贈密度をどのようにして閾値以上に上げるかということである。そのためには居場所の空間を必要以上に広げな

いこと、そして生活体が希望を共有して与贈に筋道を与えることが重要である。ここから言えるイメージとして、21世紀の社会は、多様な与贈共同体が、さらにおたがいさまの関係で集まっているであろう。

もしも人間に明日の世界があるならば、それは地球がおたがいさまの場として、人間を含める生きものたちの与贈共同体になるということである。そのこと以外には可能性はないであろう。今おたがいさまづくりの与贈を実行するかどうか、未来に来る生活者たちの存在をかけて厳しく問われている。

与贈主体、与贈共同体は、高山市真蓮寺住職・三島多聞氏の命名によるものであることをここに明記して、心から感謝を申し上げる。

